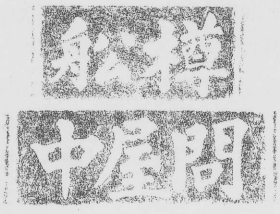
The Newsletter of NISHINOMIYA CITY MUSEUM Number 7

西宮市立郷土資料館ニュース



NISHINOMIYA CITY MUSEUM

1990. 7. 1

資料館ノート

第5回特別展「西宮の絵馬」
（平成2年8月4日→8月26日）

西宮市立郷土資料館では、一昨年より市内所在絵馬の調査を行ってきた。最初、アンケート形式で市域の全社寺に絵馬の有無を問い合わせたのち、社寺を個別に訪問調査した。その結果、西宮市内には、約150面以上の絵馬が残っていることがわかった。特別展では、これをもとに西宮の絵馬の特色を理解できるよう展示を組み立てる。ここでは、調査結果の概要を記しておく。

江戸時代の紀年銘を有する絵馬は26面確認できたが、そのなかにふたつのピークを認めることができる。ひとつは宝暦年間を中心とした18世紀後半期、いまひとつは天保年間を中心とする19世紀中ごろである。

社家町西宮神社・甑岩町越木岩神社を中心に18世紀後半期の紀年銘を有する大絵馬が数多くみられる。西宮神社では、宝暦元（1770）年尼崎藩主松平忠名奉納になる「神馬舎人添図」、明和3（1766）年奉納・月岡雪鼎画「比丘尼と武者図」、明和8（1771）年奉納・徂川白鴎斎画「鬼退治図」、明和7（1790）年奉納・月岡雪鼎画「関羽図」などがある。また、越木岩神社には、享保年間奉納「恵比寿図」、元文元（1736）年奉納「謡曲檀風図」、寛延4（1751）年奉納「恵比寿と吉祥天図」、宝暦2（1752）年奉納「神功皇后図」、安永7（1778）年奉納・白鴎斎敘滴画「神馬図」ほかがある。そのほか、上甲東園1丁目天神社に寛政7（1795）年奉納「牽馬図」がある。

19世紀中ごろの絵馬では、越木岩神社の天保2（1831）年越木岩上新田、下新田奉納になる2面の「おかげ踊り図」、天保13（1842）年奉納の瑞峯義景画「臥牛白梅図」、天神社天保14（1843）年奉納「翁嫗長寿祝い図」などが明らかになっている。

画題別にみると、全体としては武者絵・物語絵が多いが、社寺ごとに特色を表しているものがいくつかある。越木岩神社には、恵比寿や大黒天、吉祥天などを描いた絵馬が多い。松原町松原天満宮では、天保13（1842）年を初見に3面の「臥牛白梅図」がある。郷免町の須佐男神社には、合戦図が多い。これらは、いずれもその祭神にかかわるものであろう。下大市東町の永福寺には、その地蔵堂に「地獄図」がある。

いわゆる拝み図絵馬は、4神社1寺院にみられる。明治22（1889）年に奉納された越木岩神社の「賭博禁断図」や、塩瀬町名塩の木元寺に懸けられている多数の「拝み図」などがある。木元寺には、そのほか、いわば「乳形」一対も多数懸けられていて、その厚い信仰をしのばせる。

西宮市立郷土資料館蔵の踏車

東　原　直　明

西宮市立郷土資料館では、上井久義関西大学文学部教授指導のもと、民俗資料の整理を進めている。民俗資料には、揚水のための踏車６両が含まれている。

踏車は『農具便利論』（大蔵永常　1882年）には、つぎのように紹介されている。

「昔年より井路の水を高燥の田地に揚るには、龍骨車を用いる事、諸国一般なりしに、寛文年中より、大坂農人橋の住、京屋七兵衛、同清兵衛といへる人、此踏車を製作し宝暦、安永の頃までに諸国に広まり今は龍骨車を用ゆる国すくなし。」

また、その製作には、桧の薄板を湾曲させて使う高度な技術と、上質の桧材が必要とされた。発明者の京屋は、唐箕の製作で用いる技術を応用したのである。

西宮でも、享保年間に龍骨車が使われていた（『西宮市史』第２巻）。しかし龍骨車は作るのに特殊な技術が必要で、価格が高く、破損も多いので、富裕農民のみが所持できた。寛文年間に踏車が登場すると、享保期以降の新田開発による需要と相まって普及し、それから大正～昭和の電力による揚水がおこなわれるまで、踏車が使われた。

民具研究において紀年銘民具は、貴重な手がかりになる。当館所蔵の踏車６両のうち４両に紀年銘の墨書が確認できる。文化11年、嘉永５年、明治19年、大正13年という順に、35年から40年間隔で均等に開いている。この中から文化11年と、明治19年の２両についてみていくことにする。

文化11年銘踏車（2073：当館整理番号）

銘　胴体横「文化十一年□□六日」

「攝刃武　　」

明治19年銘踏車（2072）

銘　胴体横「武庫郡門戸村持」

「明治十九年八月一日新□」

羽根　「明治十九年八月一日門戸村中持」

焼印　「加島村　宮ノ前　車新　細工所」

（２両とも門戸農会旧蔵・下村富雄氏保管）

文化11年銘踏車は、銘文が事実であれば『農具便利論』出版の時点よりも古い一例となるが、形態上はほとんど同じである。

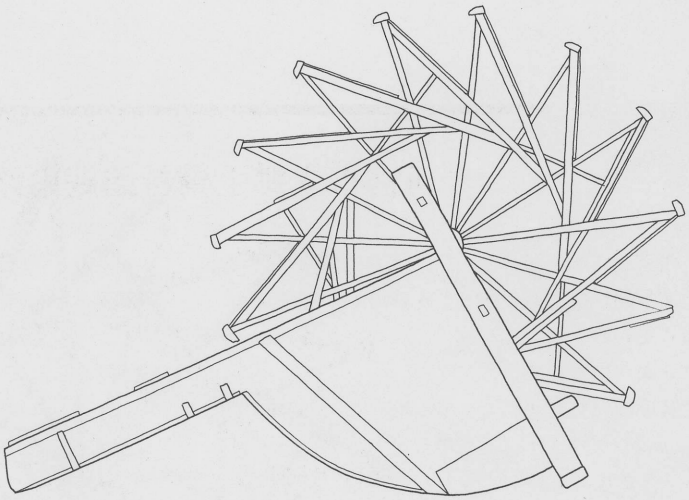
明治19年銘踏車は車の直径が大きくなり、羽根と羽根との間に新たな骨組みが取り付けられ丈夫になっている。ほかに鞘（胴部）の流水路が曲線になっているなどの改良点がみられる。

西宮で使用された踏車は、おもに大阪で購入された。当館収蔵品の中で製作地の判明しているものは、「摂州加島村（現大阪市淀川区加島）」で製作されたものである。値段は『農具便利論』によると、直径５尺５寸のもので60匁である。当時の米１石の平均の代銀と同じくらいで、高価なものだった。「津門村産出表」（『西宮市史』第６巻　1964年）によると、明治には、津門村が大阪において５丁25円で購入している。

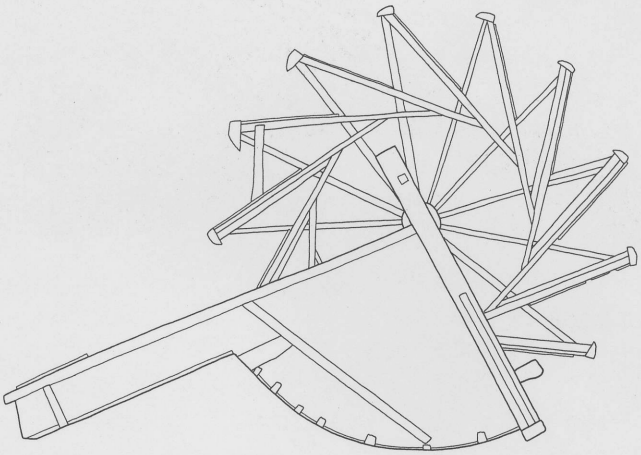
下村富雄氏からの聞き取りによると、前記２両の踏車は、旧津門村で共有され、ヒヤク（当番）が３軒ずつ３年交替で管理した。使わないときは、庄屋の納屋の屋根裏に保管されていた。日照りになると、用水路に踏車を固定して田へ水を入れた。胴体横の柱に棒を取り付けて手すりにし、さらに横木を渡して簾を掛け、これを日除けにした。車を踏む作業は、若い人が一日がかりで行ったが、とても重労働だった。踏車の所有形態には、村の共有以外に、個人持ちや仲間持ちのものもあった。

なお、これら踏車の収集・聞き取りにあたっては下村富雄氏、整理には土屋信亮氏、写真撮影、実測・製図には中森　祥氏のそれぞれ全面的な協力があった。記して感謝申し上げる。

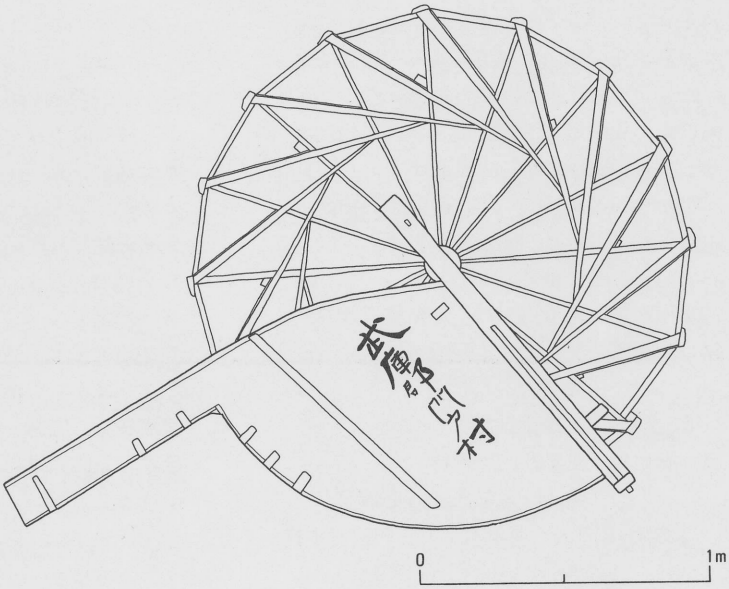
（関西大学民俗学研究会）



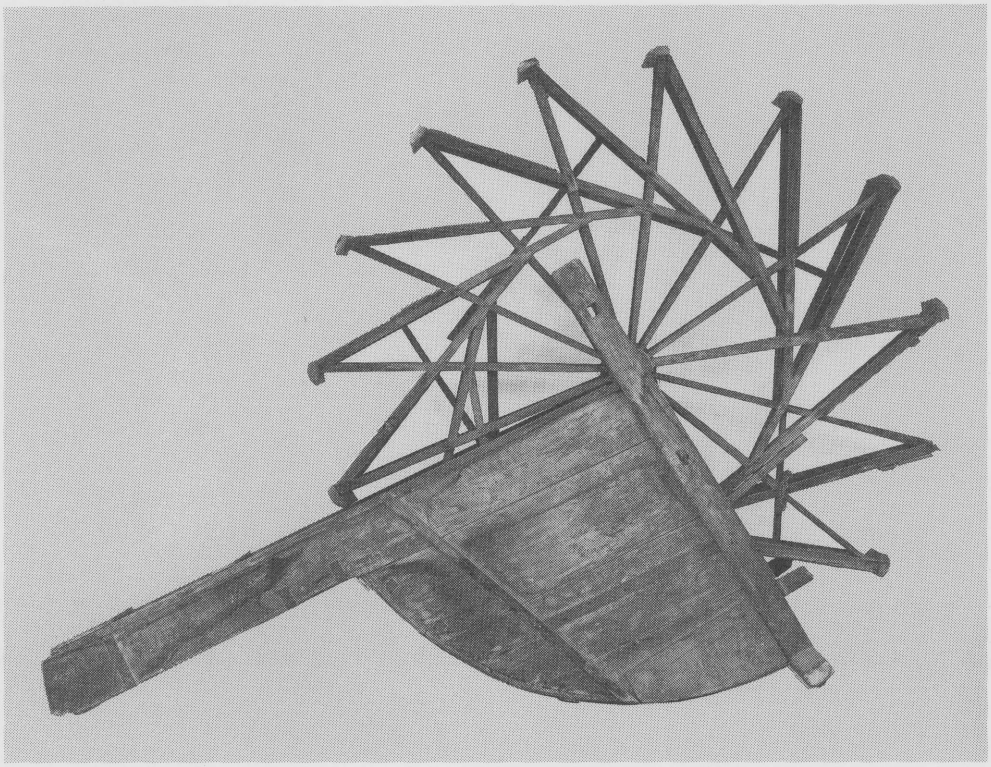
文化11年銘踏車（2073）



踏車（1867）



明治19年銘踏車（2072）



文化11年銘踏車（2073）

寄贈資料一覧

平成元年：トウミ・ムシロ５枚・田植え枠・マメカゴ(茶谷勝視)、平成２年：オルガン(増田行善)、水車・トウミ・千石とおし２点・じょれん２点・鍬３点・さらえ・天秤棒３点・足踏み脱穀機・田植定規など39点（市川正雄)、スキー板３組・ストック２組・軍服１組・モンペ上下・従軍記章・叙位証・任官証（浅井光子)、モミスリ（岡本　豊)、定規・内ガンナ・外ガンナ・ヤリガンナ・締木等26点（山中敏正)、模範女子習字教本巻四・女子教育日本史教科書・心理学全・裁縫科教科書13点（坂田フミ)、洪武通宝6483点をはじめとする古銭6493点・古銭関係文献99冊（石倉幸男)、教育勅語（澁川一雄)

ご寄贈ありがとうございました。

（平成元年12月～平成２年５月、敬称略）

目次

資料館ノート
第５回特別展「西宮の絵馬」……1
収蔵庫ノート
西宮市立郷土資料館蔵の踏車(東原直明)…2
寄贈資料一覧……4

表紙：三重県鳥羽市青峯山正福寺の常夜灯
（古川久雄氏採拓）

西宮市立郷土資料館ニュース第７号
発行　1990年７月１日　西宮市立郷土資料館
〒662 西宮市川添町15番26号 0798-33-1298